

## 要 旨

本研究は、学級活動の中で互いを様々な視点から認め合う態度を育む指導の在り方を探ったものである。まず、グループでの話し合い活動を設定し、その中で、生徒が認め合いを目で見て自覚する活動を行った。次に、振り返りシートを用いての認める態度の振り返りと、観点を与えての認める視点の探求、及び探った視点を基にした次時の目標設定をセットとした「振り返り」を行った。

この一連のプロセスを「I like it 活動」と称し、認め合いの見える化を図った。この活動を通して、生徒は様々な視点から認め合えるようになってきた。

〈キーワード〉 ①認め合いの見える化 ②「振り返り」 ③認める視点 ④目標設定

## 1 研究の目標

互いの特性を生かし、支え合う生徒を育成するために、学級活動における話し合いの場面において、互いを認め合う態度を育む指導の在り方を探る。

## 2 目標設定の趣旨

平成20年1月の中央教育審議会の答申によると、高等学校を中退する理由や、社会人の離職の理由として、人間関係をめぐる課題が挙げられることが多いとあった。このことを受け、学習指導要領では、特別活動の目標に人間関係が加えられた。現在の教育現場において、生徒たちがうまく人間関係を築くことができていないために、目標として明記されたと考えられる。昨今のニュースで聞く中高生のいじめ等は、人間関係がうまく築けないことを原因の1つとする見方もある。これらのことから、人間関係に関する課題は喫緊の課題であるといえよう。

学習指導要領解説に、学級活動を通して育てたい望ましい人間関係とは、「互いに尊重しよさを認め発揮し合えるような開かれた人間関係」<sup>1)</sup>とある。これは、互いの特性を生かして、支え合う関係であると捉えることができる。この関係を築くには、互いの特性を認め合うこと、つまり、生徒それぞれが他者の存在や性格、よさ等に気付き、受け入れることが必要であると考えられる。

私が担任をしていた学級で、4月に実施した、「グループの話し合いで自分の意見を言えるか」というアンケート調査に、「言える」と答えた生徒は6%(2名)であった。認め合うためには、互いの考えを知ることが前提となり、それは自分の考えを相手に伝えることから始まると考えると、この状態のまま認め合う関係づくりに入るのには難しいと考えた。そこで、1学期より、給食時間に共通のテーマのもと、グループ内で、自分の意見を伝え合う活動に継続して取り組んだ。その結果、9月に実施した同アンケートでは、76%(26名)の生徒が自分の意見を言えると答えるまでに成長しており、認め合う関係づくりに入る素地はできてきたと考えた。

そこで、本研究では、研究テーマ、研究課題を受け、互いに認め合う態度を育成する指導の在り方を探りたいと考えた。ここでいう認め合いとは、1対1で相互に認め合う関係だけではなく、学級やグループといった集団の中で、生徒それぞれが、それぞれの特性を認めることで成り立つ認め合いのことを表す。つまり、全員が、誰かを認め、誰かに認められている状態である。学級活動にグループでの話し合い活動の場を設定し、その中で、認め合いを目で見て自覚させた後、振り返って次時の目標を設定させる活動を仕組んで互いを認め合う態度を育むことが、互いのよさを発揮し合える人間関係の育成につながると考え、本目標を設定した。

### 3 研究の仮説

学級活動において、グループで話し合う場面を設定し、その中で認め合いの可視化と振り返りをセットとした認め合いの見える化を行っていくことによって、他者と様々な視点から認め合える生徒が育つであろう。

### 4 研究方法

- (1) 文献や先行研究を基にした振り返りと見える化に関する理論研究
- (2) 認め合いに関するアンケート調査を基にした生徒の実態調査
- (3) グループでの話し合い活動に、認め合いが見える化する活動を取り入れた学級活動の授業実践を行い、生徒の発言や態度等を基に、手立ての検証と考察

### 5 研究内容

- (1) 振り返りと見える化に関する理論研究を基に、認め合いが見える化する効果的な指導方法を見出す。
- (2) 認め合いに関するアンケート調査を実施し、その結果を分析して生徒の意欲の高まりや、態度の変容を分析、考察する。
- (3) 所属校の2年生において、「2の2思い出新聞を作ろう」(3時間)と、「新年の決意発表会をしよう」(3時間)を用いた授業実践を行い、仮説を検証し、手立ての有効性を示す。

### 6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

学習指導要領特別活動における望ましい人間関係の育成は、学級活動の内容の全てにおいて目指されるべきものであると考える。そこで、学級活動の内容のどの活動においても設定が可能な、グループでの話し合い活動において、認め合う態度を育成する指導を工夫したいと考えた。遠藤は、人間は「事実が顕在化し、問題が明らかになれば、誰かに言われなくても必要なアクションをとって対策を講じる」<sup>2)</sup>と述べており、「人間の行動を誘引するために何より重要なのは、実態や問題を包み隠さず、タイムリーに『見える』ようにすることだ」<sup>3)</sup>とも述べている。これらの特性を生かした見える化は、企業だけではなく、学校でも用いられるようになってきている。このことから、話し合い活動の中で、認め合う態度を育成する上でも、認め合いの実態をタイムリーに見えるようにすることが重要であると捉えた。そこで、認め合いの実態がタイムリーに見えるよう工夫し、自分が他者を認めることができるかどうかを明らかになることで、生徒の認める意欲を高めることができると考えた。

宮崎らは、見える化は、「見えた結果を利用し、思考し、アクションを起こすという一連のプロセスを指す」<sup>4)</sup>と述べている。本研究では、可視化と見える化を次のように定義する。可視化とは、見えなかった実態が見えるようにすることとする。そして、見える化とは、まず可視化することによって実態を把握した後、見えた実態から課題を見付けその解決策を探り、次の行動につなぐこととする。本研究の見える化の定義においては、単に実態が見えるように可視化するだけでなく、可視化した後の振り返りが重要である。そこで、認める態度の振り返りと、観点別の認める視点の探求、及び探った視点を基にした次時の目標設定を「振り返り」と称し、認め合いの可視化とセットで行うこととした。

和栗は、「確実なふりかえりのために、書く際には設問を……構造化する方法がある。米国のサービス・ラーニング分野におけるふりかえりの知見では、『ふりかえりの3ステップ』として、何を(what?)、だから何/なぜ(so what?)、ゆえに何/どうする(now what?)という構造化が広く知られている」<sup>5)</sup>と述べている。この3ステップを、本研究では、①what?=何をしたか、②so what?

=①について振り返ってみてどのように感じるか、③now what?=②で感じたことをもって次に何をどうするかを意味すると捉える。以下、これらをステップ①～③と呼ぶ。「振り返り」で用いる振り返りシートの設問を、この3ステップに基づいて構造化することで、次時の実践につながる確実な「振り返り」が可能になると考えた。

これらのことから、本研究では、他者と様々な視点から認め合える生徒を育成するために、学級活動において、認め合いを見える化することの有効性について検証することにした。まずはグループでの話し合い活動において認め合いを可視化し、タイムリーに目で見えて自覚した後、「振り返り」で設問を構造化した振り返りシートを使って自身の態度について振り返り、観点別に認める視点を探って目標を設定し、次時の実践につなげる(図1)。この一連の活動を「I like it 活動」(図2)と称した。この活動を継続して行うことにより、様々な視点で他者を認める態度の育成につながると考えた。

(2) 生徒の実態把握

10月に所属校の2年生34名を対象に、日常生活についての事前アンケートを行った。その結果、普段から級友のよさを見付けようとしている生徒は24%(8名)、それを生かして協力しようとする生徒は24%(8名)、互いの苦手なことを助け合おうとしている生徒は32%(11名)であった。これらの結果から、認め合い、協力し合うことに課題が見られた。

また、学級全体の前で意見が言えると答えた生徒は76%(26名)と、給食時間に取り組んできたグループ活動によって、自分の意見を言うことには慣れてきているように見える。しかし、実際の発表態度は、ほとんどの生徒が下を向いたり、原稿で顔を隠すようにしていた。自信をもって発言しているというよりは、聞き取りづらい音量で早口に原稿を読んでいるという状態であった。自分の意見が言えないと答えた生徒の理由は、「自分の意見が受け入れられるか心配」など、学級全体に互いを認め合う雰囲気構築されていないことに端を発していることが分かった。

(3) 検証の視点と具体的な手立て

ア 【検証の視点Ⅰ】グループでの話し合い活動の中で認め合いを可視化することによる、他者を認める意欲の高まり

(ア) 認め合いを可視化する手立てについて

認め合いを可視化するために、「認めるシール」と「I like it カード」を使用する。「認めるシール」は、グループメンバーの言動を認める際に渡し、自分が他者を認めたことを可視化するためのものである。手元にあるシールが少ないほど、他者を認めることができているということが目で見えて確認できる。グループの

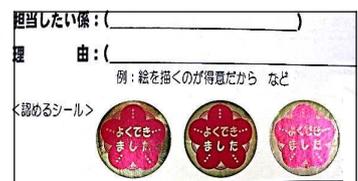


図3 「認めるシール」

人数から本人分を引いた枚数を準備し、活動中、自分が他者を認めているか否かタイムリーに見えるよう、また、他者を認める気持ちになった時すぐに渡せるよう、使用するワークシートにあらかじめ添付しておいた(図3)。認める際は、「いいね!」と一言言った後に、認めた理由を伝え、相手の「I like it カード」に貼るようにした。シールの渡し方は、グループメン

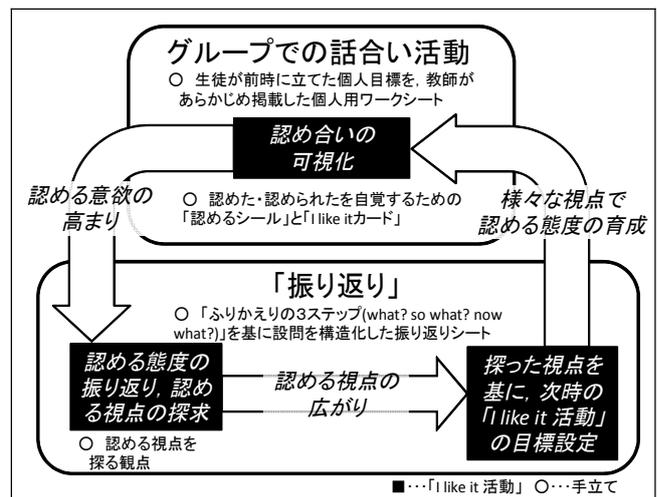


図1 研究の構想

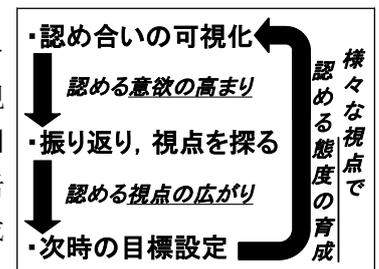


図2 「I like it 活動」

パーの中の1人に3枚渡しても、全員に1枚ずつ渡してもよいこととし、認める気持ちになれなければ渡さなくてもよいこととした。

「I like it カード」は、自分がどのくらい認められたかが目で見て確認できる。認めるシールの添付欄以外に、日付と枚数を記入する欄を設け、1つの題材の授業時間分を並べて、認められた数の変化が分かるようにした(図4)。

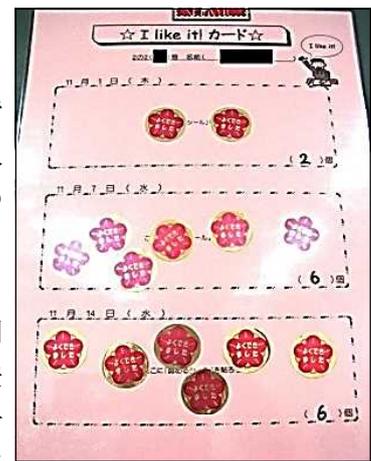


図4 「I like it カード」

(イ) グループでの話し合い活動について

認め合いを可視化するのは、グループでの話し合い活動中に7分間と決めて行った。話し合いの役割は、司会係、時間係、記録係、発表係がある。認め合いを可視化することを意識するあまり、話し合い活動が進まないことを防ぐために、生徒が常時自分の役割を意識して活動できるよう、役割が一目で分かる役割コーン(図5)をグループの中央に置いた。



図5 役割コーン

普段から、授業を行う際は本時のめあてと進行表を必ず板書し、全体で確認してから授業を始めるようにしている。そして、1つの活動が終わったらチェックをし、現在の進行度が分かるようにしている。本研究でも同様に行うが、どの場面で認め合いを可視化するかが一目で分かるよう、進行表の板書に掲示物(図6)を貼って知らせるようにした。



図6 掲示物

イ 【検証の視点Ⅱ】 「振り返り」による様々な視点から認める態度の育成

(ア) 「ふりかえりの3ステップ」に基づき設問を構造化した振り返りシートについて

資料1は「ふりかえりの3ステップ」を基に作成した実際の振り返りシートである。資料1中のA~Cがそれぞれステップ①~③に当たる。まず、Aでは、本時の活動で自分が認めた人数や回数、理由、認める態度を振り返る。そうすることで、「認める意欲が高まったもの思うように認めることができなかつた自分」または「認める意欲が高まり、思い通りに認めることができた自分」の姿を自覚する。次に、Bでは、今日の活動を振り返ってみて、次回はどうしたいのか自分の気持ちを自覚する。そして、Cでは、そのためにはどうしたらよいか具体的に考え、次時の目標を立てる。この際、観点に基づいて認める視点を探る欄を

☆I like it 活動 振り返りシート☆

H25.1.15  
202 ( ) 日 名前 ( )

(1) 「認めるシール」を渡した相手の名前と認めた理由を記入しよう。

相手の名前	認めた理由
黒	ほきはと発表した。
白	字をきれいに書いて書いた。
黒	デザインに決まるとはいい良かった。
黒	大きな声で言った。
白	1分近くお話をしてくれました。
黒	目を見て発表した。
白	何回も練習した。

(2) 自分の活動を振り返りましょう。

① 活動中他の人を認めた回数と人数は？  
回数：( 7 ) 回 人数：( 3 ) 人

② 認める態度はどうでしたか？  
(認めるためのきき方・見方・声かけの仕方、認めるシールの渡し方、顔や体の向き等)

自分も相手の目を見て発表を聞いた。  
アドバイスをした。

③ 次回はどうしたいですか？  
(例) 今回以上に認めてい い 今回と同じくらい認めてい う その他

(3) 他人を認めるには、どんなところに注目すればいいと思いますか？  
次の3つの観点から探ってみましょう！

① 「しまった！伝えられなかった！」...  
自分は気付かなかつたけれど、他の人から「いいね！」と思ったけれど今回伝えられなかったため、次回注目してみたい

○ ツールの渡し方  
○ 顔・体の向き

② 「やった！うれし！」...  
自分は気付かなかつたけれど、他の人から認められた理由で次回注目してみたい

○ 文章が良かった  
○ 字が上手  
○ 1分が一番近かった  
○ 声があてた

(4) (3)で探ったことをもとに、次回さらに多くの人を認めるための「I like it 活動」の目標を立てましょう。

どこに着目する？

目

- ツールの渡し方
- 発表している人の顔の向き
- 発表している人の顔の向き

何人・何回認める？ ( 外 ) 人 ( 外 ) 回  
2-2 全員 !!

資料1 振り返りシート

設け、探った視点を基に目標設定させることで、より具体的な目標となるようにした。生徒が立てた目標はスキャナーで取り込み、次時のワークシートにあらかじめ載せておくことで、生徒が自分の目標を常時確認できるようにした(資料2)。

(イ) 認める視点を探る観点について

更に多くの他者を認めるには、どこに着目して活動すればよいかを探るための手立てとして、認める視点を探る観点を与える。それぞれの観点とねらいについては表1に示す。

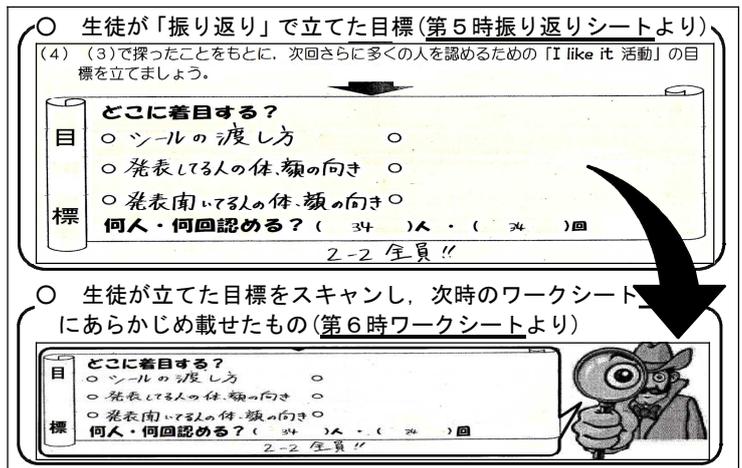
観点Ⅰは自分自身のことを振り返るだけでよいので記入しやすい。それに対して、観点Ⅱは他者と自分、観点Ⅲは他者と他者のやりとりについて振り返るため難度が上がる。そのため、記入が難しい場合は観点Ⅰのみの記入でよいこととした。

(4) 授業の実際

検証授業は、11月に「『2の2思い出新聞を作ろう』内容(2)オ 望ましい人間関係の確立」(3時間)、1月に「『新年の決意発表会をしよう』内容(2)イ 自己及び他者の個性の理解と尊重」(3時間)を題材に行った。各時のめあてと生徒の活動内容を表2、表3に示し、認め合いの可視化を行う部分を下線で、「I like it 活動」全体を斜体で表す。「2の2思い出新聞を作ろう」は、学級や自分自身の普段の学校生活や各行事に対する取組を振り返り、級友との協力や、学級のために自分にできることについて再考することのできる題材である。学級のこれまでの思い出を振り返り、協力して学級新聞を完成させようとする取組を通して、互いに認め合い、協力する態度を育てることがめあてである。「新年の決意発表会をしよう」は、新しい年を迎え、3年生への進級を控えた時期に、中学生生活最後の年をどのように過ごすべきか改めて考えることのできる題材である。

表2 11月実施検証授業の概要

「2の2思い出新聞を作ろう」(11月実施)			
時	第1時	第2時	第3時
めあて	グループで「2の2・10大ニュース」とトピックスを、お互いに認め合いながら決めよう	お互いのよさを生かして作成の役割分担をし、新聞作りをしよう	思い出新聞を完成し、今後の更なる団結に向け個人目標を立てよう
主な活動	1 事前に個人で書いた「私が選んだ2の2・10大ニュース」を見て、級友がどんな思い出を印象深いと思っているか知る。(個) 2 「私が選んだ2の2・10大ニュース」の中から、「私たちのグループが選んだ2の2・10大ニュース」を決める。その中から新聞記事にするためのトピックスを1つ選ぶ。(グループ) 3 「私たちのグループが選んだ2の2・10大ニュース」とグループトピックスを発表し「学級全体で選んだ2の2・10大ニュース」を決定する。(斉) 4 振り返り(個)	1 自分たちのグループが選んだトピックスについて、「いつ」「どのようなことがあったか」振り返り、ワークシートに記入する。(個) 2 「I like it 活動」の目標を確認する。(個) 3 グループで話し合い、実際に記事にする内容と、記事のタイトルを決める。(グループ) 4 役割分担をする。(グループ) 5 割り付けを話し合い、新聞作成にとりかかる。(グループ) 6 振り返り(個)	1 「I like it 活動」の目標を確認する。(個) 2 「記事完成まで」(記事やタイトルの工夫点等)のことについて話し合う。(グループ) 3 「記事完成まで」について発表し、グループで作成した記事を貼り合わせていき1つの新聞に仕上げる。(斉) 4 他のグループの記事や発表のよかった所を話し合う。(グループ) 5 完成した新聞を見て思い出を振り返り、今後の更なる団結に向け個人目標を立てる。(個) 6 振り返り(個)



資料2 前時の「振り返り」で生徒が立てた目標を次時のワークシートに載せた例

表1 認める視点を探る観点とねらい

認める視点を探る観点 (振り返りシートより抜粋)	ねらい
<b>観点Ⅰ</b> 「しまった！ 伝えられなかった！」 …いいね！と思ったけれど、今回伝えられなかったので、次回注目してみたい	認めるシールを渡す時間は毎回7分間とした。そのため、どんなに認める意欲が高まろうと、躊躇しているうちに時間が来てしまい、認めを伝えられない場合も考えられる。この観点で探ることで、行為としては表出しなかった活動中の自分の思考を再度振り返ることができる。伝えられなかった自分の認める気持ちを自覚し、次回は伝えようとする気持ちや態度につなげることをねらいとした。
<b>観点Ⅱ</b> 「やった！うれしい！」 …自分は気付かなかっただけで、他の人から自分が認められた理由で、次回注目してみたい	この観点で探ることで、他者の自分への認めを振り返り、それについて自分自身がどのような気持ちになったかを振り返ることができる。誰かに認められている自分を意識して振り返ることで、自分だけでは気付くことができなかった新たな「他者を認める視点」を獲得し、かつそれを次回は他者に還そうとする気持ちや態度につなげることをねらいとした。
<b>観点Ⅲ</b> 「あの人が うれしそうだったな」 …自分は気付かなかっただけで、他の人が認められていた理由で、次回注目してみたい	この観点で探るためには、自分と他者の関係だけでなく、他者同士の関係を見ることが必要となる。そのため、この観点で探ることができない生徒は、この欄は空欄でよいこととした。自分だけでは気付くことができなかった新たな「他者を認める視点」を獲得しつつ、さらには他者の気持ちを想起して共感することで、相手意識を高め、次回の実践につなげることをねらいとした。

表3 1月実施検証授業の概要

「新年の決意発表会をしよう」(1月実施)			
時	第4時	第5時	第6時
めあて	新年の決意をし、お互いを認め合いながらアドバイスし合って「私の今年の漢字」を決め、書き表そう	「私の新年の決意」が伝わる発表の工夫を考え、互いにアドバイスし合いながら発表練習をしよう	新年の決意発表会をし、お互いの決意や発表の仕方を認め合おう。
主な活動	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 今年の主な行事予定を聞き、学習・生活・部活動その他において、自分はこの1年をどう過ごしたいか考え、記入する。(個)</li> <li>2 1の決意を表す漢字の候補をいくつか挙げる。(個)</li> <li>3 「I like it 活動」の目標を確認する。(個)</li> <li>4 <u>それぞれの新年の決意とそれを表す漢字候補を披露し、互いの決意を認め合いながらアドバイスをを行う。(グループ)</u></li> <li>5 アドバイスを基に、自分の決意を表すのに最適な「私の今年の漢字」を決め、清書する。(個)</li> <li>6 振り返り(個)</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 発表原稿を作成した後、発表の工夫を考え、原稿に赤色でト書きを加える。(個) ・「私の今年の漢字」提示のタイミング ・強調する所等</li> <li>2 「I like it 活動」の目標を確認する。(個)</li> <li>3 <u>発表原稿を基に、互いの特性や日頃の頑張りを、決意が表れるような発表になるようアドバイスし合いながら発表練習をする。(グループ)</u> グループメンバーからのアドバイスによって、原稿内容を変更したり、発表の工夫を加えたりする場合は、原稿に青色で書き加える。(個)</li> <li>4 振り返り(個)</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 「I like it 活動」の目標を確認する。(個)</li> <li>2 自分の新年の決意を、「私の今年の漢字」を提示しながら、全体に発表する。本時はグループではなく、学級全体での認め合いとなる。発表を聞き、認める気持ちになったら、すぐに認めるシールを渡すのではなく、認めた理由をメモ欄に記入しておく。認める気持ちになれなければメモ欄は空欄のままにしておく。(斉)</li> <li>3 <u>2でメモしたことを基に、全体交流で級友を認め、理由を伝える。(斉)</u></li> <li>4 全体での振り返りをす。級友を認めた理由を、挙手して発表する。(斉)</li> <li>5 振り返り(個)</li> </ol>

の自分や学級の様子を振り返って新年の決意を漢字1字で書き表したり、級友に新年の決意を表明するための発表練習を行ったりする際に、互いにアドバイスし合うことで、互いの特性や日頃の頑張りを理解し合い、尊重し合う態度を育てることがめあてである。

(5) 授業の考察

ア 【検証の視点Ⅰ】グループでの話し合い活動の中で認め合いを可視化することは、他者を認める意欲を高めることに効果的であったか。

まず、認める意欲の高まりを、生徒の振り返りシートの記述から考察することとする。生徒の振り返りシートの記述によると、活動中「級友のよいところを見付けようとしたか」という設問に対し、6時間とも全員が「した」と答えた。また、「次はどうしたいか」という設問に対しても、6時間とも「今回以上に認めたい」「今回と同じくらい認めたい」と全員が答えた。いずれの結果も他者を認める意欲の高まりを示している。

次に、認め合いを可視化することと認める意欲の高まりの関係性について、事後アンケートの生徒の自由記述から考察することとする。

第6時後に行った「I like it 活動」に関する事後アンケート中の、認め合いを可視化したことについての生徒の自由記述を見ると、認める意欲が高まったのは、認め合いを可視化したことで、認め合いの実態が目に見え、自分がどの程度他者を認めることができているかが顕在化した結果であると考えられる(資料3 下線部)。

- ・ シールでどれだけ自分が人を認められるかよく分かった。
- ・ 思った以上に少なかったので、これからもっともっと認めていきたい。
- ・ シールで認め合いが目に見え、認める意欲が増えた。
- ・ シールがあることで、どれだけ認めることができているかわかり、積極的に認めるようになった。
- ・ シールがなくなると、たくさん認めることができたと分かり、シールをなくそうと思った。
- ・ シールで認める気持ちがちゃんと形として表せるから、どんどん認めたいと思った。

資料3 「I like it 活動」に関する事後アンケートにおける認め合いを可視化したことについての生徒の自由記述

以上のことから、認め合いを可視化することは、他者を認める意欲を高めることに効果的であったといえる。

イ 【検証の視点Ⅱ】「振り返り」は、様々な視点から認める態度を育成することに効果的であったか。

まず、様々な視点から認める態度が育成されたかどうかを、認め合いの量と質の両面から考察することとする。

認め合いの質の考察は、生徒が認め合いの可視化の際に「認めるシール」を渡した理由、つまり認めた理由を、振り返りシートに記述したのから行う。この認めた理由を、3つの「認めた視点」に振り分け、時間毎の変容を見る。3つの「認めた視点」は、①発言内容や発言回数、発言態度に関する視点、②発言態度以外の態度に関する視点、③相手の認める気持ちや態度も含め

た情意面に関する視点とする。これらの視点を、ここではそれぞれ①の視点、②の視点、③の視点と呼ぶ。初めに、全員の振り返りシートに記述された認めた理由を、資料4の例のように3つの視点に振り分けた。「認めた視点」毎の認めた理由の例は表4に示す。そして、記述された全ての認めた理由の総数に対する、それぞれの視点で認めた理由の総数の割合をグラフにし、視点の広がりを考察した(図7)。

認めた理由		
前回お発言(2)		①の視点
先生の話し合いをすわてくれた。		②の視点
他のクラスのいいところを、先生から教えてくれた。		①の視点
しっかりお話を聴いてくれた。		②の視点
みんなをたのしませてくれた。		③の視点

認めた理由		
発表の日、全員の目を見ていた。		①の視点
発表の日、目を合わせ、やりあっていた。		①の視点
まわりのことを、考えられようと思った。		③の視点

資料4 認めた理由を「認めた視点」に振り分けた例

第1時は「I like it 活動」初日であるため、前時に「振り返り」を行っていない状態で認め合いを可視化した。そのため、認める意欲は高まったものの、どこを認めればよいか分からず、1人も認めることができなかった生徒が4名いた。また、1名以上認めることができた生徒の「認めた視点」は、目に見えやすい①の視点が98%を占めた。そのため、発言の少なかった生徒は認められることがなかった。それに対し、「振り返り」を行い、認める視点を探って設定した具体的な目標を基に認め合いを可視化した第2時から、徐々に②や③の視点が増えていった。第5時には、認め合うことで初めて気付く③の視点が、目に見えやすい①の視点と同数まで増え、認め合いの質の高まりが見られた(図7)。

表4 「認めた視点」毎の認めた理由例

認めた視点	認めた理由
①の視点 (発言内容や発言回数、発言態度に関する視点)	<ul style="list-style-type: none"> <li>意見が具体的だった</li> <li>たくさん発言した</li> <li>ハキハキと言った</li> <li>原稿を覚えてみんなの方を見て発表した</li> </ul>
②の視点 (発言態度以外の態度に関する視点)	<ul style="list-style-type: none"> <li>きれいにメモをとってくれた</li> <li>時間係の仕事をきちんとしてくれた</li> <li>相手の目を見て話を聞いていた</li> <li>ずっと笑顔だった</li> </ul>
③の視点 (相手の認める気持ちや態度も含めた情意面に関する視点)	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分がされてうれしかったことを他の人にもした</li> <li>色んな人を認めようとして、前回のシールも使っていた</li> <li>自分の苦手を克服しようとしていた所がすごかった</li> <li>目標に込められた思いがすごくよかった</li> </ul>

認め合いの量の考察は、生徒が振り返りシートに記述した認めた回数と人数の学級平均の推移から行う。認めた回数は、生徒の手持ちの「認めるシール」(4名グループは3枚、2名グループは1枚)がなくなっても、「エアシール」と言って渡すふりをした回数も含めて記述させた。認めた人数の学級平均は、学級全員がそれぞれに自分のグループメンバー全員を認めた場合、2.88名となる。この値をここでは認めた人数の最大値と呼ぶ。

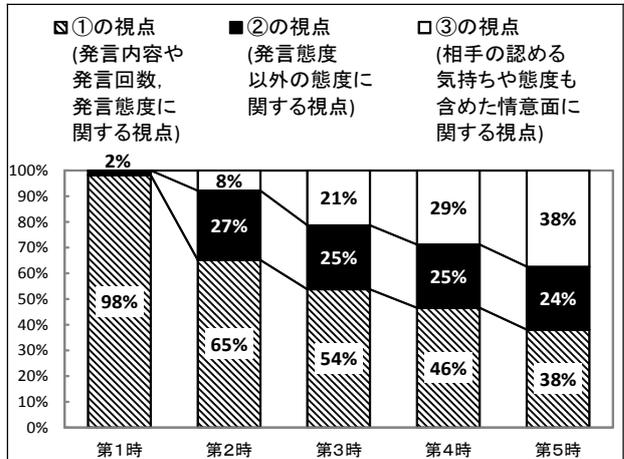


図7 「認めた視点」の広がり

様々な認める視点に気付き、認め合いの質が高まったことで、認め合いの量、つまり認めた回数や人数も増加した。

認めた回数は、第2時にはすでにそれぞれの「認めるシール」の持ち数である3枚を超えており、シールがなくなっても認めようとしていたことが分かった。この時から、生徒全員の「I like it カード」に最低1枚は「認めるシール」が貼られており、本研究における認め合いの定義である、全員が誰かを認め、誰かに認められている状態は第2時で達成した。また、認めた人数は、第5時には認めた人数の最大値まで0.09名と迫っており、全員が全員を認め、全員から認められているという

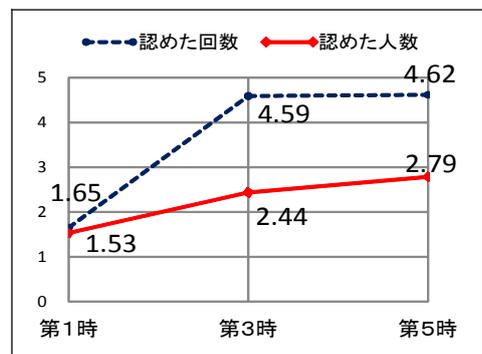


図8 認めた人数と回数の学級平均

う状態にまで近付いてきている。認めた回数、人数とも増加しており、認め合いの量の高まりが見られた(前頁図8)。

認め合いの質と量の考察の結果、両面ともに高まりが見られ、様々な視点から認める態度が育成されてきていることが分かった。

次に、「振り返り」と、様々な視点から認める態度の育成との関係性について、事後アンケートの生徒の自由記述から考察することとする。第6時後に行った「I like it 活動」に関するアンケート

中の、「振り返り」に関する生徒の自由記述を見ると、観点別に認める視点を探ったことで、自分だけ、または自分と相手の関係だけではなく、グループ内の自分以外の人間関係にも注目するようになり、様々な認める視点到に気付くことができたといえる。また、以前は他者を認めるといってもどこ

観点別に「認める視点」を探ったことに関する記述
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 以前は意見の内容ばかり気にしていたけれど、他の人が態度のことで私を認めてくれたのを振り返り、私も内容だけでなく相手の態度も見ようになった。</li> <li>・ 前は意見ぐらしか認めることがないと思っていたけれど、他の人が認められている理由を取り入れ、視点が増えた。</li> <li>・ 振り返りで他の人の認めた理由も取り入れ視野が広がり、あいまいだった視点が具体的になった。</li> <li>・ たくさん認めている人が認めていた理由を振り返ると、たくさんの人を認めるためにはいろんなところに注目した方がいいと気付いて、話す態度や聞く態度も見ようになった。</li> </ul>
探った「認める視点」を基に目標設定したことに関する記述
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 探った視点を基にして目標を立てられるようになったら、次の活動でその目標を達成できるようになった。</li> <li>・ 前は同じところしか認められていなかったけれど、探った視点を基に目標を立てて活動したから、今は色々な所を認めることができるようになった。</li> <li>・ 初めは何を認めるかよく分からなかったけれど、視点の目標を立てたことで何を認めるかよく分かったから、少しでも認める所を多く見付けようとするようになった。</li> <li>・ 初めてのときは「とりあえず」でシールを渡していたけど、視点をいろいろ考えて目標を立てたので、細かい所も見ようになっていって、どんどん認めるレベルが上がっていった。</li> </ul>
前時に立てた目標が掲載されたワークシートに関する記述
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分が書いた目標が貼ってあって見えるから、目標にそってよいところを見付けようとした。</li> <li>・ 振り返りを生かして目標を立てることで、「次は絶対やってやろう！」って思えるようになって、迷った時はワークシートの目標を見て「あ！そうだった！」と思い出して、認めることができた。</li> </ul>

資料5 「I like it 活動」に関する事後アンケートにおける「振り返り」に関する生徒の自由記述

を認めるのかが分かっていなかったのに対し、認める視点を基に具体的な目標設定を行ったことで、どこに着目するかが明確になったことが分かった。更に、自分が立てた目標がワークシートに載せられていることで、活動中認める視点を意識して他者と関わるよう促され、様々な視点で認める態度へとつながったと考えられる(資料5下線部)。

以上のことから、「振り返り」は、様々な視点から認める態度を育成することに効果的であったといえる。

ウ 生徒の変容

「I like it 活動」を通しての生徒の授業中の変容を、第6時後に行った事後アンケートの生徒の自由記述と、6時間の検証授業のビデオ映像より考察することとする。

第6時後に行った「I like it 活動」に関するアンケートで、生徒自身と級友の態度面や情意面での変化について聞いたところ、認める意欲が高まり、多くの人を認めようとしたことで、自身の聞く態度がよくなったとの記述が見られた。更に、級友の聞く態度も同様によくなったことや、話す内容以外でも認められることを嬉しく感じたことから、話し合い活動中の発言態度や、全体の前での発表態度もよくなったと感じていることが分かった。また、認める態度もよくなり、自分だけでなく、相手が他のメンバーからも認められるよう努め出し、思いやりが生まれ、学級の雰囲気明るくなったとの記述もあった(次頁資料6下線部)。

そこで、聞く態度、話し合い活動の様子、発表態度及び認める態度について、生徒がアンケートに記述している通りの変容が見られるかどうかを、6時間の検証授業のビデオ映像より考察した。

まず、聞く態度、話し合い活動の様子及び発表態度についての考察結果を述べる。第1時で「認めるシール」を全く渡せなかった4名の生徒も含む全員が、「振り返り」で認める視点を探ってから、相手の発言内容だけでなく、発言態度にも注目し始めたため、聞く態度が変容した。第1時は話す相

手の方を見ずに聞いていたのに対し、第2時からは相手の方を見て、反応を示しながら聞くようになった。それに伴い、発言態度も改善され、話し合い活動の様子や、全体の前での発表態度が大きく変わっていった。話し合い活動の様子について見てみると、第1時は9グループ全てが自分のワークシートを見ながら話し合っていた。それに対し、第3時には9グループ中6グループが、第5時には全てのグループが、顔を寄せ合うようにして話し合うようになった。全体の前での発表の様子について見てみると、第1時は、9グループの発表者9名全員が、原稿で顔を隠すように下を向いて発表していた。それに対し、第3時には同じメンバー全員が、要所要所で顔を上げ、聞いている相手を意識して発表するようになった。また、学級全員に全体の前での発表の機会があった第6時には、学級全員に同様の発表態度が見られるまでに成長した。

自分の態度面での変化についての記述	
・	認めるところを見つけるため、話を聞く時は相手を見て聞くようになった。
・	耳を傾けるよう夢中になって聞いてくれるから、自分自身の話す態度がよくなった。
・	相手がここを気付けてあげたらうれしいだろうとか、自分がこうしたら相手は喜ぶだろうと思って行動するようになった。
・	みんなに認めてもらえるから少しずつ自分から意見を言えるようになった。
・	相手の人が他の人から認められるようにするために、相手が行ったことに感想を言うようになった。
・	自分が認めたことで、どんな風にすれば認められるか分かったので、発表しやすくなった。
・	認め方ひとつで相手はもっと喜ぶから、優しく認められるようになった。
級友の態度面での変化についての記述	
・	誰かの意見だけでなく、いろんな人の意見を聞こうとするようになった。
・	聞く態度が、こっちがとでも緊張するぐらい見てくれるようになった。
・	意見を言うときや発表するとき、伝えるようアピールするようになった。
・	役割を手伝ってくれたり、話を聞こうしたりと、思いやりが出てきた。
・	良いところを伝え合うことで、相手も自分も優しい気持ちになれ、みんなの表情が明るくなった。
・	認める時も認められる時も楽しそうだったり嬉しそうになって、学級の雰囲気が明るくなった。
・	男女関係なく関わられるようになった。
自分の情意面での変化についての記述	
・	自分が認められて嬉しかったから、他の人が誰かに認められたときも嬉しいと思うようになった。
・	認めることができた自分も嬉しいし、認められた人も喜ぶことが分かり、たくさんの人を認めたいと思った。
・	どんどん細かい所までみて認め合いたいから、たくさん話し合いたいと思った。
・	何回もI like itを渡し続けているから、心が穏やかな気持ちが出てくる。
・	自分が誰かを思いやることで、相手からも思いやりしてもらえたり、他の人から認められたりしたので、もっと思いやるようになった。

資料6 「I like it 活動」に関する事後アンケートにおける生徒自身及び級友の態度や情意面での変化についての生徒の自由記述

次に、認める態度についての考察結果を述べる。第1時は、認める際、相手を全く見ずに「認めるシール」を相手のカードに貼っていた。それに対し、自分の認める態度を振り返ってから行った第2時からは、相手の顔を見て認める理由を伝え、「認めるシール」を手渡しで渡す生徒が出始めた。第5時には全員が、相手の顔を見て笑顔で認める理由を伝えるようになった。グループの枠を取り払った第6時の全体交流でも、男女を問わず同様の態度で認め合う様子が見られた。

次に、認める態度についての考察結果を述べる。第1時は、認める際、相手を全く見ずに「認めるシール」を相手のカードに貼っていた。それに対し、自分の認める態度を振り返ってから行った第2時からは、相手の顔を見て認める理由を伝え、「認めるシール」を手渡しで渡す生徒が出始めた。第5時には全員が、相手の顔を見て笑顔で認める理由を伝えるようになった。グループの枠を取り払った第6時の全体交流でも、男女を問わず同様の態度で認め合う様子が見られた。

聞く態度、話し合い活動の様子、発表態度、及び認める態度についてのビデオ映像による考察の結果、生徒がアンケートに記述している通りの変容が見られたといえる。

最後に、「I like it 活動」が日常生活に与える影響について、事前(10月)・事後(1月)に行ったアンケート結果から考察することとする。

図9は、検証授業の事前・事後に行った、日常生活についてのアンケート結果を比較したグラフである。普段から級友のよさを見付けようとしている生徒は82%(28名)、それを生かして協力しようとしている生徒は82%(28名)、互いの苦手なことを助け合おうとしている生徒は79%(27名)まで増えており、認め合う雰囲気が醸成されてきつつあるといえる。また、認め合う雰囲気の醸成に伴い、学級全体の前で意見が言えると答えた生徒は、

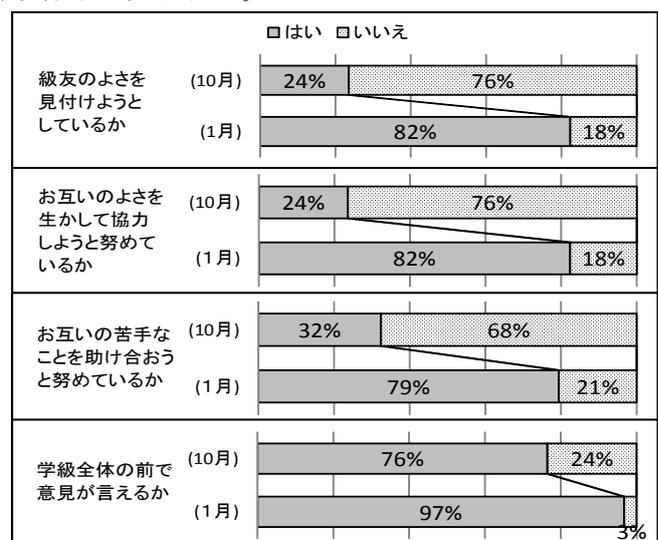


図9 事前・事後に行った日常生活に関するアンケート結果

97% (33名)まで増えた。

以上のことから、「I like it 活動」を通して、様々な視点で他者を認める態度が育成されたことが、日常生活にもよい変化をもたらしているといえる。

## 7 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

本研究を通して、他者と様々な視点から認め合える生徒の育成には、次のような手立てが有効であることが明らかになった。

#### ア 認め合いの可視化について

- ・ 学級活動において、グループで話し合う場面を設定し、その中で認め合いを可視化することで、生徒の他者を認める意欲が高まった。

#### イ 「振り返り」について

- ・ 振り返りシートの設問を構造化することで、確実な「振り返り」を促すことができた。
- ・ 観点を与えて認める視点を探らせたことで、様々な認める視点に気付かせることができた。
- ・ 認める視点を含む具体的な目標を設定させ、それを次時のワークシートにあらかじめ載せておくことで、様々な視点から他者を認める態度の育成を感じる事ができた。

#### ウ 認め合いの見える化について

- ・ 認め合いの可視化と「振り返り」をセットとした、認め合いの見える化を行っていくことで、様々な視点から認め合える集団になり、日常生活でも互いの特性を生かして支え合う集団の育成につながった。

### (2) 今後の課題

- ・ 「I like it 活動」を継続的に行い、「認めるシール」がなくても、日常的に認める気持ちを伝え、認め合える集団の育成を目指し、今後は更に学年全体、学校全体に認め合う雰囲気が醸成されていくよう、年間指導計画や指導事項についての系統性を図る必要がある。
- ・ 生徒に確実な「振り返り」を促す効果的な活動の工夫と指導方法について、更に研究を深める必要がある。

### 《引用文献》

- 1) 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』 平成20年 p. 25
- 2)3) 遠藤 功著 『見える化』 2005年10月 東洋経済新報社 pp. 20-21
- 4) 宮崎 洋ら著 『「見える化」実践のポイント』 『所報No. 47』 2006年11月  
三菱総合研究所 p. 134
- 5) 和栗 百恵著 『「ふりかえり」と学習』 平成22年3月  
国立教育政策研究所紀要 第139集 p. 85

### 《参考文献》

- ・ 脇田 孝豪著 『教育活動の「見える化」の試み』 『部落解放研究195号』 2012年7月  
部落解放・人権研究所